京都大学文学研究科　グローバル COE　「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

学会発表渡航支援報告書

（ふりがな） 氏　　名	いとうまりこ 伊藤まり子	所属・職名 国立民族学博物館・外来研究員
発 表 題 名 （英　　語）	Living in the intimacy－A case study of Caodaism community in Hanoi city, contemporary Vietnam	
著　者　名	Mariko, ITO	
会　議　名 （英　　語）	The 4th Next-Generation Global Workshop	
開催地（国、市）	Seoul, Korea	
参 加 期 間	2011 年 11 月 24 日～11 月 26 日	

次世代グローバルワークショップは、京都大学グローバル COE プログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」にもとづき、次世代研究者のための研究報告および交流の場となることを目的として、2008 年から開催されてきた。第 4 回目となる今回は、「The Nation-States and Beyond: Private and Public Spheres under Globalization」を共通テーマとして、社会学を中心とするさまざまな分野専攻の若手研究者たちが集い、アジアの各地域社会を対象とするそれぞれの研究報告をおこなった。

報告者は、「Living in a intimacy－A case study of Caodaism community in Hanoi city, contemporary Vietnam」というタイトルで、ベトナムの首都ハノイ市で活動する宗教コミュニティ「ハノイ聖室」を対象に、そこに集う寡婦、独身者、離婚経験者といった社会的境遇にある女性の信徒たちの関係性と、その間で生起する「親密性」に関して、文化人類学的視点から考察した研究報告をおこなった。

本報告では、まず、①共同体概念を再考する学問的動向のなかでの個人への視点を明示した。すなわち近代化のなかに付置される個人が、それまで所与のものと認識してきた伝統的な価値観や生活様式が大きく揺さぶられる現実に直面しながらも、自発的な連帯や共同性を創りだしながら多元的な日常的実践を展開するエージェントとして捉えられるという点である。次に、②ベトナム社会における上述のような女性たちの位置づけと、ベトナム戦争後の社会変容との相関を指摘した。そして、報告者が対象とする宗教コミュニティ「ハノイ聖室」が、こうした個人（女性）が社会に参画するための社会空間として編成されている点を指摘した。これらの点をふまえて、さらに、彼女たちの宗教的活動に着目し、活動を通じた個人の自発的な連帯や共同性にもとづく親密な関係の生起と展開を明らかにした。

本報告は、当該コミュニティを基盤とした個々人の関係構築の過程を、日常的に繰り広げられる些末な相互行為に着目して民族誌的に記述した、報告者の博士論文の一部であった。そのため、報告自体は時間の制約もあり、詳細な言及までにはいたらなかった。ただし、コメンテーターからの質問を通じて、今後、同様のコミュニティや、他の地域社会における事例との比較をしながら分析を深め、「親密性」あるいは「親密圏」概念を相対化していく視点となりえる可能性を見いだすことができた。また、世界各地の大学所属の若手研究者と交流をもつことができた点においても、今

学会発表渡航支援報告書

後、研究を進めていくうえで非常に有意義な経験となった。

　こうした貴重な経験を与えてくださった貴大学のグローバル COE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」、および学会発表渡航支援に、深く感謝する次第である。